

## 年間1億円が域外流出！

きっかけは5年ほど前、東北芸術工科大学の三浦秀一教授が自然エネルギーの調査で当地を訪れたときのことだ。調査後の報告会で「三瀬地区は灯油や電気、ガスなど光熱費（ガソリン代は除く）で年間1億円が地域外に出ていつている」という結果を聞いて、鈴木さんは「そんなに!？」と衝撃を受けた。

三瀬地区は500戸・人口1500人の小さいむらだ。高齢化率32・7%、今後も年金暮らしの高齢世帯が増えていくなか、おカネが出ていくばかりでは地元がどんどん寂れるのが目に見えている。

「外に出ていく燃料代の半分、いや3分の1でも地元で取り戻せないか」と感じた鈴木さんは「人一倍もったいない根性が強い」と自負する人物。若いころ自生ワラビを荒れた田んぼに植えて増やした経歴を持つ。今回は、地元にあるもので真っ先に目についたのが山林だった。

「最近、木質バイオマス発電が話題になったけど、わざわざ木を燃やして電気をつくるなんてバカバカしいの。燃やした熱はそのまま利用するのが一番。薪で熱エネ自給しかない」と考えた。そこで目下、地元の木を使った薪の販売に本気で力を入れている。

## 薪燃料の復活で山を元気にしたい

三瀬地区の山林面積は1000haほどだが、うち750haが民有の人工林。長い間、三瀬

鶴岡市の市街地

# 山と薪で 1億円の 流出を止める

山形県鶴岡市・三瀬地区

東北でもいま、熱エネの取り戻しに燃えている小さいむらがある。

日本列島の各地で同時多発的に広がる

熱エネ自給圏構想。これは本物の流れだ。

ここ山形県鶴岡市三瀬地区では、

薪で元気になるうと、

地元のままさまざまな人たちがつながりだしている。

牽引役の株式会社フォワードさんぜ

代表・鈴木正さん(58歳)に話をうかがった。

文〓編集部 写真〓曾田英介

日本海東北自動車道  
三瀬IC



薪割りの作業場に集まった「三瀬の薪研究会」のメンバー。中央が鈴木正さん（本業は自動車販売・修理店）

2005年の市町村合併により東北の自治体で最も広い面積になった鶴岡市（約13万2000人）。三瀬地区は昭和の大合併以前の旧豊浦村の大字にあたり、現在は端から端までが2km圏内のひとつの自治会になる



の人々の暮らしを支えてきたのがこの山の恵みだ。海から吹き上げる強い風と適度な湿気で育ったスギは、硬くしまって弾力性にも富み、住宅建材として高く評価されてきた。

1950年代は地元には8つの製材所があり、切り株を使ったスギ下駄の商売も盛んだった。スギの端材や不材もたくさん出るので、かまどや風呂だけでなく、時計型のブリキの薪ストーブでスギの薪がたいへんよく使われてきた地域でもある。

鈴木さんも10haの持ち山があり、父親の代までは林業に携わっていた。1964年（当時6歳）の新潟地震で家を建て替えるまではかまどがあり、風呂も薪で焚いていた。最後



三瀬地区

地元スキー場の高台に登ると2km圏内にすっぽりと収まる三瀬地区が一望できる。鶴岡市の市街地からは車で30分、高速道路のインターもあり交通アクセスに恵まれている